

ひ の くち い せき
樋ノ口遺跡

—宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



2019

宮 崎 市 教 育 委 員 会

ひ の くち い せき
樋ノ口遺跡

—宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2019

宮 崎 市 教 育 委 員 会

序

本書は平成 28 年度に宅地造成に伴い発掘調査が実施された樋ノ口遺跡の報告書です。

樋ノ口遺跡は佐土原町上田島字樋ノ口に所在し、中世に創建されたとされる大光寺や、地域の皆様に親しまれている鬼子母神大祭がおこなわれる吉祥寺が近くにあります。

発掘調査では、近世の遺構や当初の想定を遥かに超える多くの縄文土器や石器が見つかりました。樋ノ口遺跡は丘陵裾部の標高 7 m 程度の場所に立地していますが、このような低地で縄文時代の遺跡が確認されることは宮崎県内では珍しく、地域の歴史を語る上で欠かせない遺跡となりました。この樋ノ口遺跡を記録した本書が、地域の歴史を学び活用する際の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご理解をいただいた事業者の皆様を始め、硬い土に悪戦苦闘しながら掘削をおこなってくださった作業員の皆様など、樋ノ口遺跡の発掘調査にご理解、ご協力いただいたすべての皆様方に感謝申し上げます。

平成 31 年 3 月

宮崎市教育委員会

教育長 西田 幸一郎

例　言

1. 本書は宮崎市教育委員会が平成 28 年度に実施した、宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 本発掘調査は、宮崎市教育委員会が民間事業者から依頼を受け実施した。

工事届出（文化財保護法第 93 条）平成 28 年 10 月 13 日

3. 発掘調査は以下の手続きにより実施した。

着手報告：平成 28 年 12 月 7 日（宮教文第 812 号 4）完了報告：平成 29 年 2 月 6 日（宮教文第 812 号 6）

発見通知：平成 29 年 2 月 6 日（宮教文第 812 号 5）保管証：平成 29 年 2 月 14 日（宮教文第 812 号 7）

4. 現地における発掘調査、室内整理作業は以下の期間実施した。

発掘調査：平成 28 年 12 月 1 日～平成 29 年 1 月 31 日

整理作業：平成 30 年 2 月 14 日～平成 30 年 3 月 31 日

5. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会

発掘調査

（平成 28 年度）

調査総括 文化財課長 日高 貞幸

埋蔵文化財係長 井田 篤

調整事務 主 査 金丸 武司

庶務事務 主 任 事 武富 知子

調査担当 主 任 技 師 石村 友規

嘱 託 白上いづみ

整理作業

（平成 29 年度）

調査総括 文化財課長 羽木本光男

副主幹 埋蔵文化財係長 井田 篤

調整事務 主 査 金丸 武司

庶務事務 主 事 杉尾 悠

整理担当 主 任 技 師 石村 友規

嘱 託 沼口 常子

報告書作成

（平成 30 年度）

調査総括 文化財課長 富永 英典

主幹 埋蔵文化財係長 井田 篤

調整事務 主 査 稲岡 洋道

庶務事務 主 事 杉尾 悠

整理担当 主 任 技 師 石村 友規

嘱 託 沼口 常子

6. 掲載した現場図面の実測及び現場写真の撮影は、石村、白上がおこなった。

7. 掲載した遺物の実測、製図は石村、沼口をはじめ嘱託員が、遺物の写真撮影は石村が行った。また、一部石器の実測は、宮崎市文化財課金丸武司、秋成雅博の協力を得た。

8. 本書で使用する土色の表記は『新版 標準土色帖』による。

9. 本書の図で使用する方位記号はすべて真北を示す。

10. 本書の執筆、編集は石村がおこなった。

11. 出土遺物および掲載図面、写真等は宮崎市教育委員会で保管している。資料の閲覧・利用等に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	1
第1節	地理的環境	1
第2節	歴史的環境	1
第Ⅱ章	調査の成果	3
第1節	調査に至る経緯	3
第2節	調査の経過	3
第3節	基本層序	3
第4節	縄文時代の調査成果	4
第5節	近世の調査成果	15
第Ⅲ章	総括	18

挿図目次

第1図	周辺遺跡位置図	2
第2図	調査区位置図	2
第3図	遺構配置図	4
第4図	基本層序及び基本層序写真	4
第5図	土坑7実測図及び出土遺物実測図	5
第6図	包含層出土土器分布図	5
第7図	包含層出土土器実測図①	6
第8図	包含層出土土器実測図②	7
第9図	包含層出土石器石材別分布図	9
第10図	包含層出土石錐分布図	9
第11図	包含層出土石器実測図①	10
第12図	包含層出土石器実測図②	11
第13図	包含層出土石器実測図③	12
第14図	包含層出土石器実測図④	13
第15図	土坑1実測図及び出土遺物実測図	14
第16図	土坑2実測図及び出土遺物実測図	14
第17図	土坑3実測図及び土坑4実測図	14
第18図	土坑5実測図	15
第19図	土坑6実測図及び出土遺物実測図	15
第20図	溝状遺構1土層断面図	15
第21図	その他出土遺物実測図	15

表目次

第1表	出土土器観察表	16
第2表	出土陶磁器観察表	16
第3表	出土土製品観察表	16
第4表	出土石製品観察表	17
第5表	出土石器観察表	17

写真図版目次

図版1	調査区遠景及び調査区全景	20
図版2	縄文時代遺構、包含層調査状況	21
図版3	縄文時代出土遺物①	22
図版4	縄文時代出土遺物②	23
図版5	近世調査状況、近世出土遺物	24

第Ⅰ章 はじめに

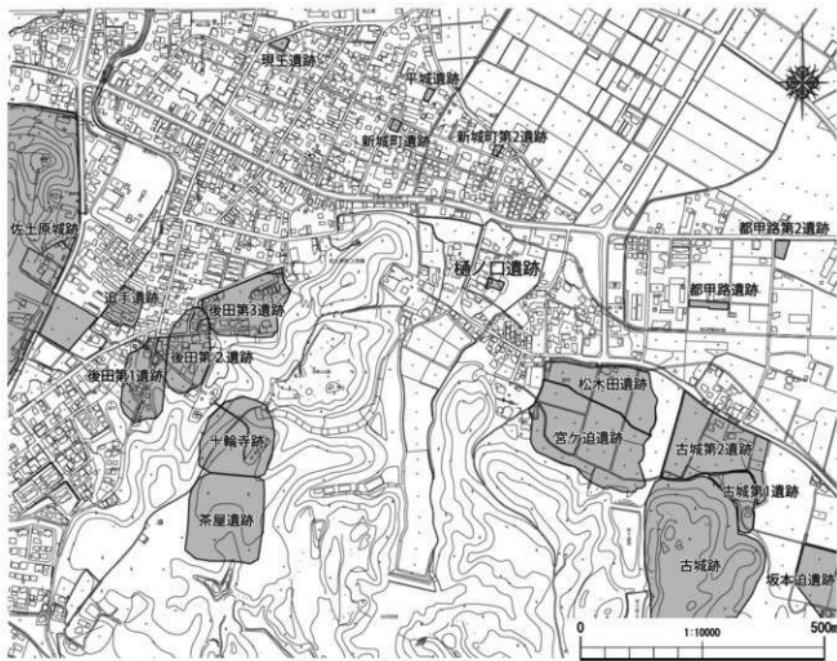
第1節 地理的環境

樋ノ口遺跡が所在する宮崎県宮崎市は九州島の南東部に位置する。市域の大部分は、耳川河口～西都～綾～青島を結んだ三角地帯に広がる宮崎平野の南端に位置するが、北西側は九州山地、南西側は南那珂山地が連なる。宮崎平野は主に宮崎層群を基盤としており、宮崎市域では標高20～80mの丘陵（台地）部と、標高10m以下の低地部からなる。また、市域の東側は日向灘に面しており、青島以北は30km余りの砂浜海岸となっている。

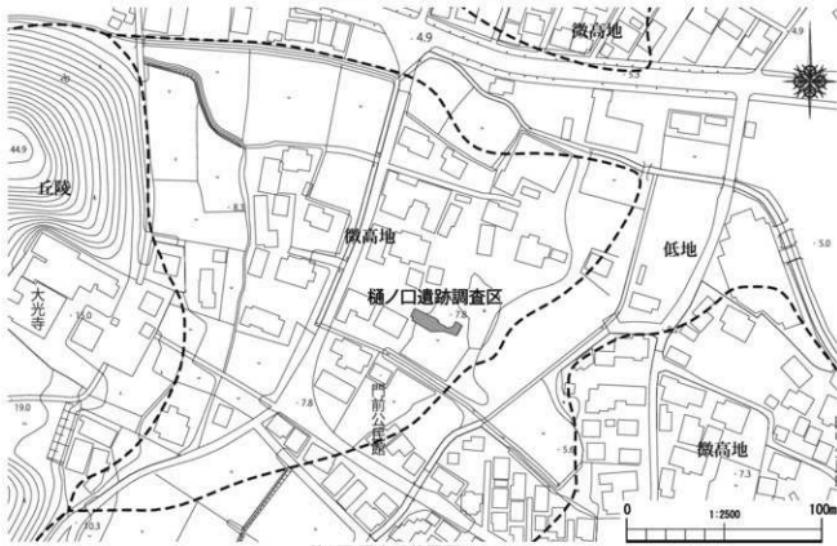
樋ノ口遺跡は宮崎市の北端付近に位置し、遺跡の北側1kmには九州山地から日向灘へと流れれる一つ瀬川が所在し行政区画の境界となっている。当遺跡は一つ瀬川右岸に位置する丘陵である宝塔山から北東へ伸びる尾根先端に取り付く、標高7m程度の微高地上に立地する。微高地の周囲は前述の丘陵が存在する西側を除いて、比高差2～3m程度の低地となっており、調査区はこの微高地の東端付近に位置する。

第2節 歴史的環境

樋ノ口遺跡周辺では旧石器時代の遺跡は確認されておらず⁶、分布の中心は当遺跡の西方3km付近に位置する西上那珂の丘陵上となる。縄文時代においても同様の傾向であるが、僅かに宝塔山の南に連なる丘陵上に立地する隱山遺跡において、縄文時代草創期の爪形文土器が出土している。西上那珂の丘陵上に所在する別府原遺跡、長薗原遺跡では、縄文時代早期の炉穴や集石遺構が多数検出されるなど、多くの遺跡が確認されている。しかし、アカホヤ火山灰降灰後は西上那珂丘陵上においても低調となり、上ノ原遺跡で縄文時代中期の船元式土器が出土している程度である。弥生時代も当遺跡周辺では分布が希薄であり、宮ヶ迫遺跡において山之口式の甕や石包丁などが出土している程度で明確な遺構は検出されていない。古墳時代になると、宮ヶ迫遺跡において多数の土器焼成坑を伴った後期から終末期の集落が検出されている。また小さな谷を挟んで東側に隣接する古城第2遺跡では移動式竈が出土しており注目される。古代になると、古城第2遺跡において、須恵器、瓦生産に関わる遺構が検出されている。「金光」の刻書須恵器や円面硯、瓦など国分僧寺や官衙的様相を示す遺物が出土していることから、これらの施設に生産した須恵器や瓦を供給していた集団の集落と考えられる。また古城第2遺跡に後続する時期を中心とした、須恵器、瓦の窯跡である下村窯跡が当遺跡から南に1km付近に所在する。中世には当遺跡の南西に近接する位置に大光寺が造営された。発掘調査が成された遺跡としては、古城第2遺跡において木製の枠をもつ井戸や四面庇の大型掘立柱建物、宮ヶ迫遺跡で土坑墓が検出されている。また、宝塔山を挟んで西側の丘陵上には、伊東氏の重要な拠点であった佐土原城が築かれる。島津氏との戦いに敗れ伊東氏が豊後に逃れた後は島津氏が入城する。関ヶ原の戦い後、一時的に旗本領となるものの、江戸時代になると再び島津氏の分家が佐土原城に入り、城周辺に城下町が形成される。幕末頃に作成されたとみられる「佐土原城下図」によると、樋ノ口遺跡周辺には武家屋敷が形成され、「田中幸吉」、「兼蔵」の文字が見える。



第1図 周辺遺跡位置図 (S=1/10000)



第2図 調査区位置図 (S=1/2500)

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 調査に至る経緯

平成 28 年 1 月 27 日、宅地造成に伴い、宮崎市佐土原町上田島字樋ノ口 93 番地 2 外における埋蔵文化財所在の有無について照会がなされた。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「松木田遺跡」に近接しているほか、平成 24 年度におこなった詳細分布調査の際に遺物が表採されていたことから、平成 28 年 2 月 17 日、18 日にかけて試掘調査を実施した。調査の結果、中世もしくは近世に位置付けられる柱穴に加え、包含層中から縄文時代中期の土器が確認された。この試掘調査結果を受け、宮崎県文化財課は新発見の埋蔵文化財包蔵地「樋ノ口遺跡」として登録した。

その後、事業者と埋蔵文化財の保存についての協議をおこなったが、宅地分譲区画内の道路部分に関しては埋蔵文化財への影響が免れないことから、平成 28 年 12 月 1 日から平成 29 年 1 月 31 日にかけて発掘調査による記録保存をおこなった。調査区の面積は 120 m²、包含層掘削面積は 65 m²、計 185 m²を調査対象とした。

第2節 調査の経過

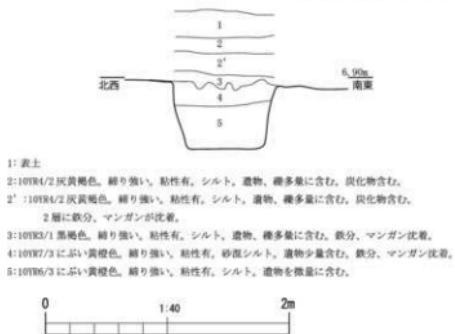
調査はバックホウにより、表土と試掘調査で現代の造成土と認識していた灰黄褐色土（基本層序 2 層、2' 層）を除去し、にぶい黄橙色土（基本層序 4 層）上で遺構検出をおこない、その後に縄文時代の遺物包含層である 4 層を掘り下げる計画であった。しかし、表土剥ぎをおこなう過程で 2 層も縄文時代の遺物包含層であることが明らかになったため、バックホウによる掘削を 2 層上に止め、人力でその上面の遺構検出作業をおこなうことにした。削平によって表土直下で 4 層が検出された調査区西側部分を含め、検出された近世遺構の調査をおこなった後、2 層の掘り下げをおこなった。掘削面積は 65 m²と狭小であったが、多量の遺物と非常に硬い土質から、掘削に多くの時間を費やすことが想定された。そのため先行して試掘トレンチや搅乱を精査し、4 層に包含される遺物量の確認をおこなった。結果として、4 層に包含される遺物が少量であることが確認できたため、調査対象の主体を 2 層に変更し、4 層は 2 層掘削後に部分的に掘り下げるかたちで調査をおこなった。

第3節 基本層序

今回の調査における基本層序は第 4 図のとおりである。調査区の西端では前述のとおり表土下において 4 層が検出される状況であった。これは本来の地形が西から東へと緩やかに下降傾斜する地形であったものを、地形的に高い西側を削平し平坦にしたためである。また、部分的に色調が 2 層に類似する現代の搅乱土が表土下から検出された。2 層は下位に鉄分が沈着する部分がみられ、2' 層に細分される。3 層は 4 層上面が窪んだ部分にのみ堆積するが、何れも不整形かつ浅いものであり、遺構ではなく自然の落ち込みと考えられる。



第3図 遺構配置図 (S=1/200)



第4図 基本層序図 (S=1/40) 及び基本層序写真

第4節 繩文時代の調査成果

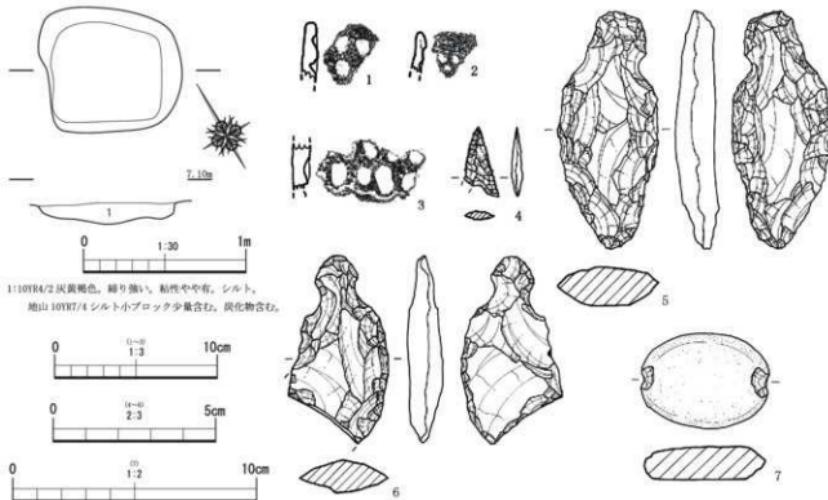
1. 遺構

縄文時代に帰属する遺構は土坑1基のみである。

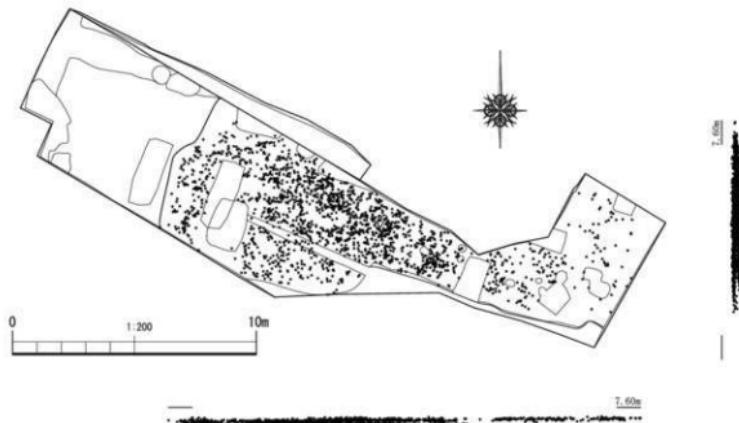
土坑7 調査区の中央南に位置し2層上面で検出された。平面形は隅丸方形で長軸0.96m、短軸0.75m、深さ0.12mを測る。埋土は単層で包含層である2層と似ているが、やや色調が暗く炭化物が目立つ。遺物は床面付近から出土した。1～3は縄文土器である。何れも棒状工具による刺突文が施される。宮之迫2式に位置付けられる。4、5は安山岩製の石匙である。今回の調査で出土した石器の中で安山岩はこの2点のみである。5は先端を欠損しているが、欠損部を再加工し刃部を作出している。6は砂岩製の石錐である。橢円形の石材の長軸2ヶ所を打ち欠いて抉りを作出している。

2. 包含層

土器の概要 基本層序2～4層において出土した土器は点上げができたもので1800点を数える。しかし、出土した土器は非常に脆く、代わって包含層が非常に強固であったため、取り上

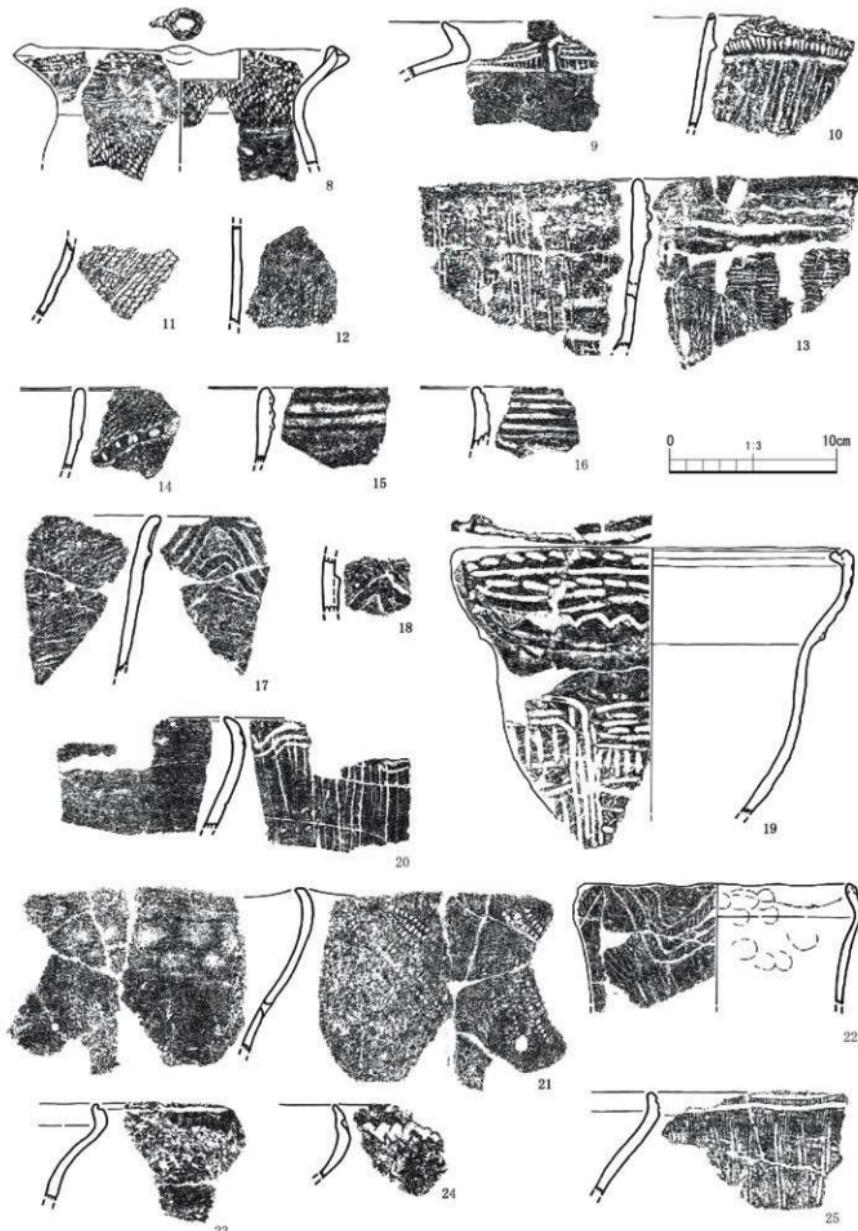


第5図 土坑7実測図(S=1/30)及び出土遺物実測図(S=1/3、2/3、1/2)

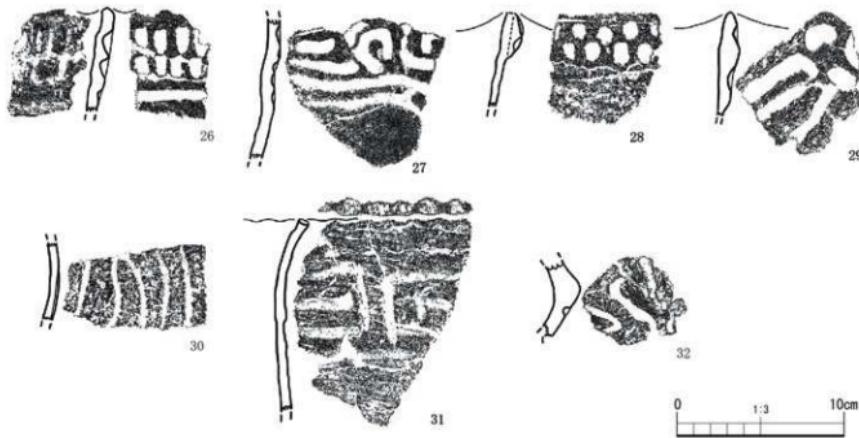


第6図 包含層出土土器分布図(S=1/200)

げ時に破損したり、取り上げそのものが不可能な土器も多数あった。そのため分類や図化をおこなうことができなかつたものが大勢を占める。本来であれば分類した土器分布の検討も重要であるが、前述の理由から今回の調査では意味を成さないためおこなっていない。出土土器全体の分布傾向としては、調査区の中央付近に分布の核があり、微高地の縁辺部に近い東側は分



第7図 包含層出土土器実測図① (S=1/3)



第8図 包含層出土土器実測図②(S=1/3)

布密度が低い。また、調査区中央付近は土器の分布が上下2群に分かれしており、時期差を表していると思われるが、前述のとおり出土した土器の遺存状態が悪く判然としない。西側の分布密度が中央より低いのは、削平により遺物包含層である2層そのものが薄くなっているためと考えられる。

今回掲載することができた土器は、縄文時代中期中葉から後期初頭にかけてのものであるが、紙幅の都合上掲載できなかった資料や、図化ができなかった資料の文様や胎土を見ると、掲載資料が概ね出土資料全体の傾向を示していると思われる。また図化をおこなった土器内での比較であるが、後期に位置付けられる土器が2層上位から出土している。

船元式系土器（8～12） 船元式土器の影響を受けて製作されたと考えられる土器である。地文は縄文、貝殻条痕の双方が確認されている。8は頸部の屈曲がやや強く口縁部は僅かに内湾する。9は口縁部が内側へ強く屈曲するいわゆるキャリバー形口縁を呈する。10は口縁部下位に刻目貼付突帯を施す。11、12は縄文地で胎土に結晶片岩を含む。

上水流タイプ（13～18） 13は口縁部下位に突帯を貼付ける。またその下位に補修孔と思われる1孔の穿孔が施されている。14は口縁部下位に突帯を貼付け、その突帯に刻目を施す。17、18は口縁部下位に山型の突帯を貼付ける。

春日式土器北手牧タイプ（19） 29は口縁部がキャリバー形を呈し、口縁部から胴部にかけて沈線による施文をおこなう。また、口縁端部内面に突帯を貼付け、口縁部が受口状を呈する。

春日式土器前谷タイプ（20～25） 何れも口縁部はキャリバー形を呈する。施文方法は沈線、貼付突帯による。未掲載ではあるが貝殻条痕文を施した胴部片も出土している。

宮之迫式土器（26～29） 26、27は棒状工具による強い施文により、土器内面への突出が見られる。28、29は土器内面への突出が顕著ではない。宮之迫1～2式に位置付けられる。未掲載ではあるが宮之迫3～4式土器も出土している。

岩崎上層式土器 (30) 薄手の器壁に沈線文による施文を施す。

西和田下層式土器 (31) 頸部の縮りは弱く直線的な器形となる。口縁端部に刻みを施し、口縁部に太く浅い沈線で直線的な文様を施している。

中津式土器 (32) 繩文地に深い沈線により J 字状の曲線を施文する。

この他に掲載することができなかつたが、春日式土器後半段階の資料、無文土器が出土している。

石器の概要 2 層から 4 層で出土した石器の総数は 451 点を数える。限られた調査範囲ではあるが、石材別の出土状況を見ると、姫島産黒曜石とチャートの分布域がほぼ重なり、調査範囲の西側から中央に分布し東側では出土しない。製品の特徴としては、一括で取り上げたものや、後世の構造に混入したものを含め 92 点の石錐が出土しており、調査面積や製品における割合を考えると非常に数量が多い。

石鎌 (33 ~ 44) 33 ~ 35 は長さが 2.5cm 以上の当遺跡では大型に属する石鎌である。33 は基部の抉りが浅く、35 は抉りが深く、34 はその中間の形態を呈する。37 ~ 40 は基部の抉りが深い、41 ~ 44 は基部の抉りがほとんど無い形態である。33 ~ 37、41 がホルンフェルス製、38 ~ 40、42 はチャート製、43、44 は黒曜石製である。

石鋸 (45、46) 45、46 は石鋸である。石鎌に形態が類似するが、鋸歯状の調整が明瞭に施されており、素材も黒曜石で同一であることから弁別した。

石匙 (47) 47 はチャート製の石匙である。刃部の先端を欠損している。

石錐 (48 ~ 50) 48 ~ 50 は石錐である。48 はホルンフェルス製で上端部を欠損する。49、50 は頁岩製である。

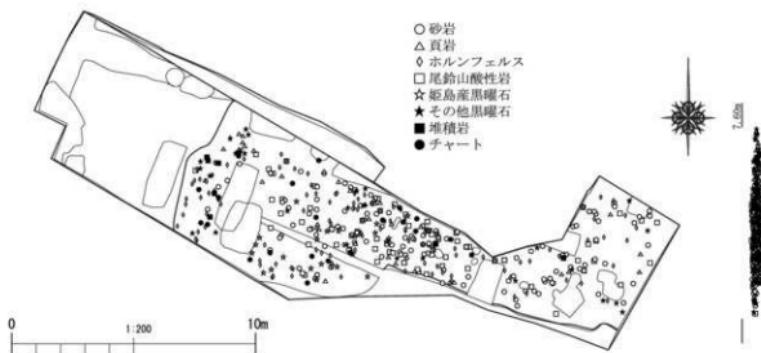
打製石斧 (51、52) 51、52 はホルンフェルス製の打製石斧である。両資料共に刃部を欠損する。

磨製石斧 (53、54) 53、54 は磨製石斧である。敲打調整の後に磨き成形している。53 はホルンフェルス、54 は砂岩製である。両資料共に刃部を欠損する。

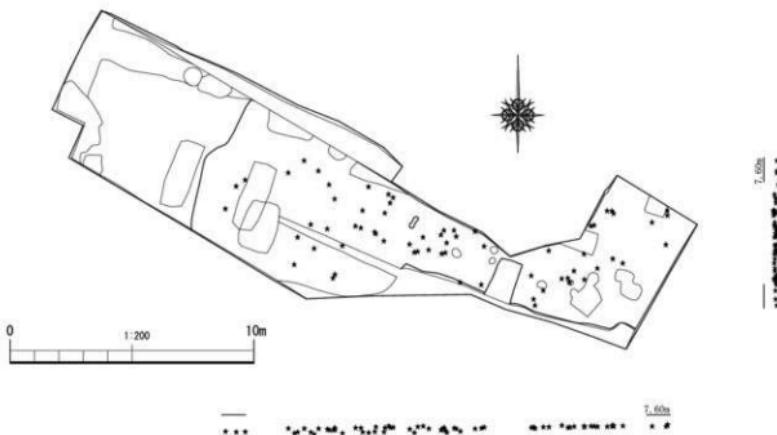
スクレイパー (55 ~ 65) 55 ~ 65 はスクレイパーである。素材はホルンフェルス、頁岩、砂岩、堆積岩、尾鈴山酸性岩とバリエーションに富む。尾鈴山酸性岩は硬質で岩石内の含有物も多く調整が容易ではないが、未掲載資料を含め 6 点出土していることから、選択的に素材として利用している可能性がある。62 は石錐の破片をスクレイパーとして再利用している。

石刀 (66、67) 66 は頁岩製の石刀である。表面の最終調整は長軸に沿った丁寧な研磨による。柄部には紐巻きを表現したものと思われる沈線が彫りこまれている。刃部は欠損しており形状は不明である。67 は石刀の未成品である。擦痕は不定方向で 66 のように一定方向に揃わないことから、成形途中に制作を放棄したものと考えられる。

石錐 (68 ~ 81) 68 ~ 75 は短軸に縄掛けを作出するタイプである。68 は打ち欠きや研磨ではなく敲打によって縄掛けを作出している。69 ~ 75 は打ち欠きにより縄掛けを作出しているが、69、71、72 は打ち欠き部に敲打を加え、打ち欠きによって生じた角を丸めている。これは縄を掛けた際に、縄が角で擦れて切れるのを防ぐ工夫と考えられる。75 は割れた縄を加工し石錐としている。76 ~ 78 は長軸に縄掛けを作出するタイプである。未掲載資料も含め 7 点出土しているが、1 点を除き重量が 80 g 以下と小型のものが中心である。79 ~ 81 は有溝石錐である。



第9図 包含層出土石器石材別分布図 (S=1/200)



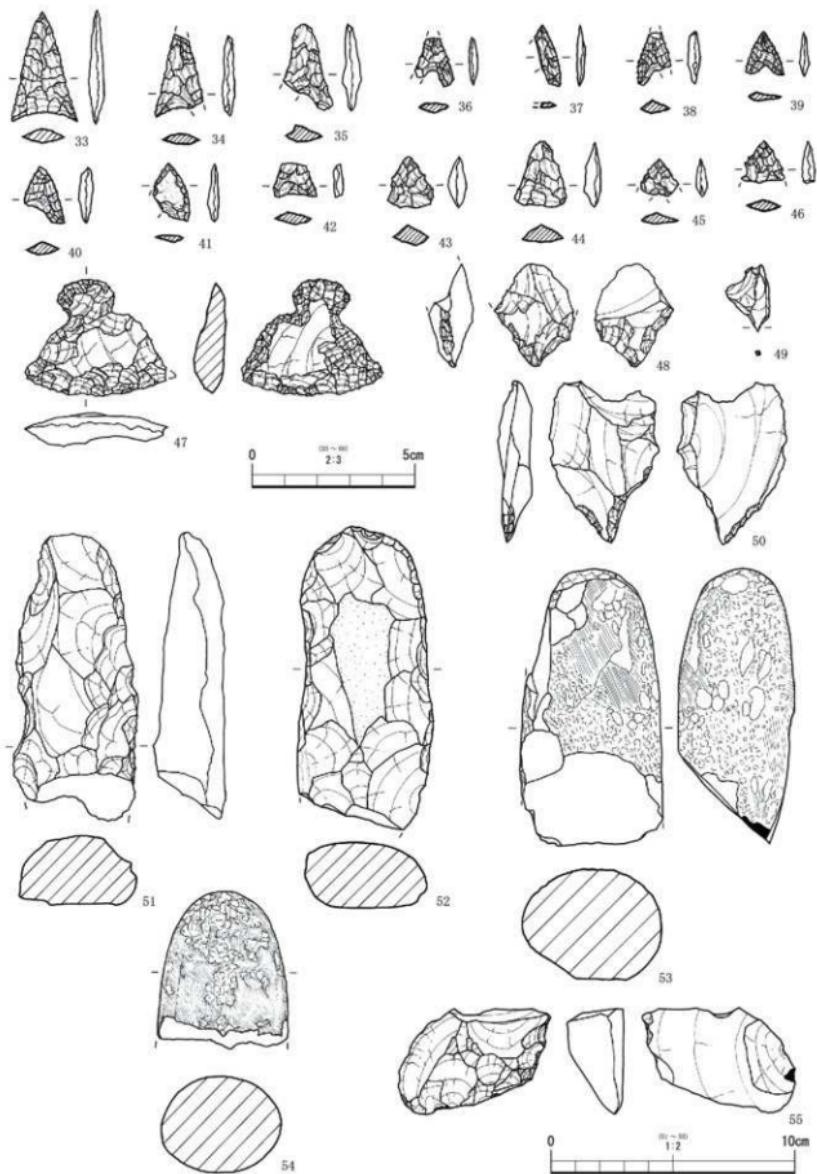
第10図 包含層出土石錘分布図 (S=1/200)

79は砂岩、80、81は尾鈴山酸性岩製である。79、80は敲打によって溝を作出する。81は敲打後に溝を研磨している。

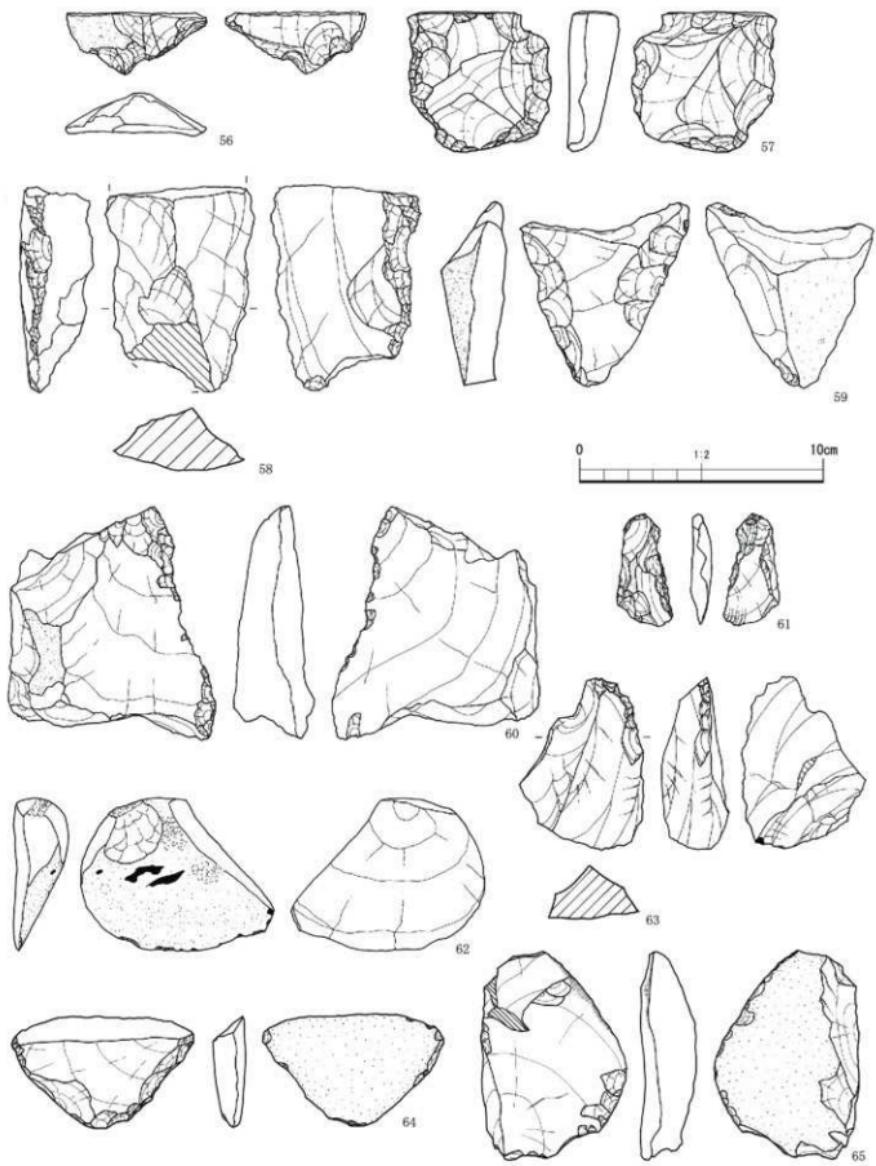
磨石(82、83) 82、83は磨石である。82は砂岩、83は尾鈴山酸性岩製である。82は長期にわたり使用されたとみられ、磨面が平坦になっている。

敲石(84) 尾鈴山酸性岩製の敲石である。主に突出した短辺を敲打部としている。

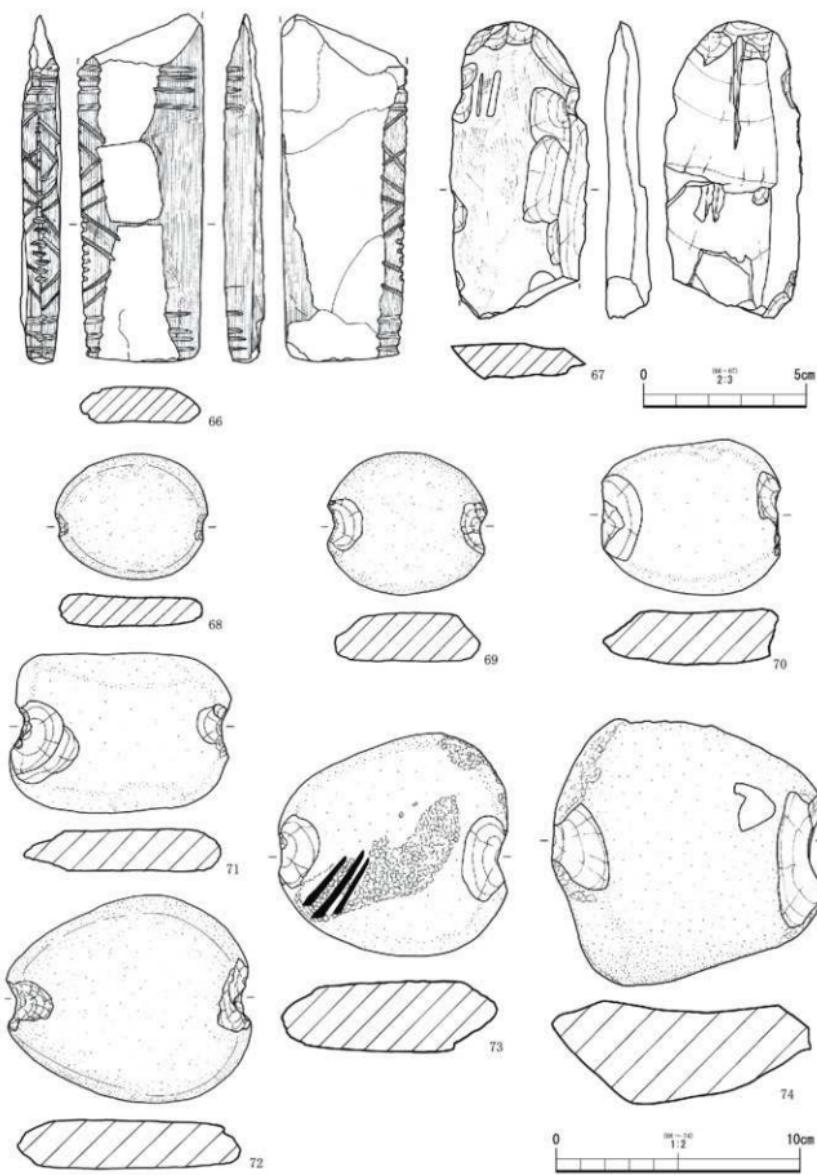
砥石(85) 砂岩製の砥石である。表面に擦痕が明瞭に残る。



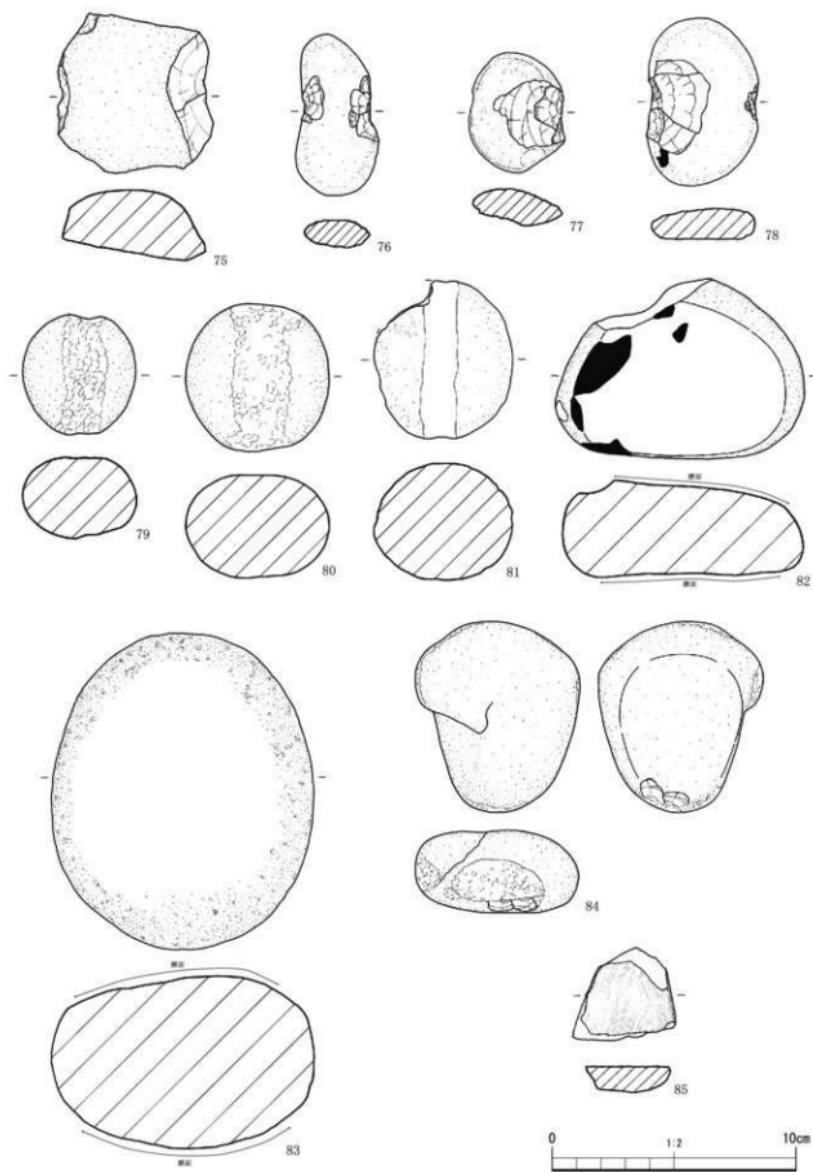
第 11 図 包含層出土石器実測図① (S=2/3、1/2)



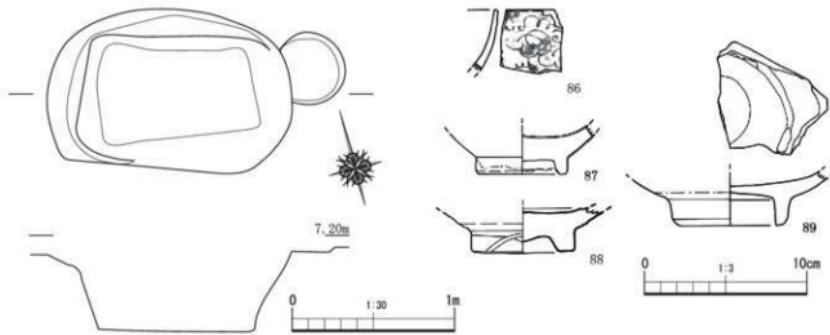
第12図 包含層出土石器実測図②(S=1/2)



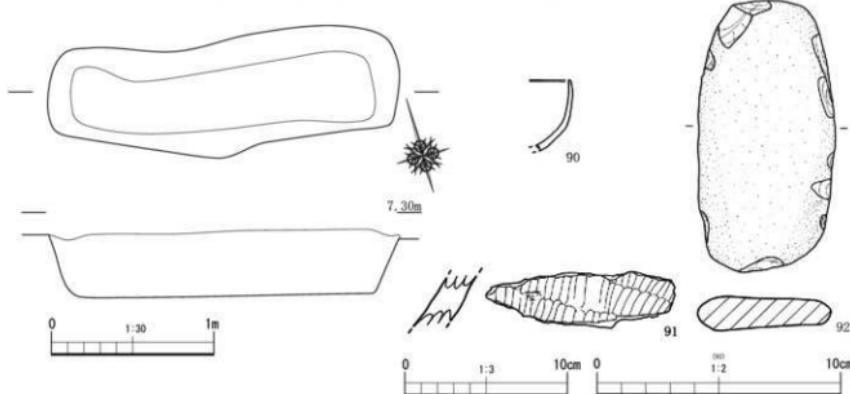
第13図 包含層出土石器実測図③(S=2/3, 1/2)



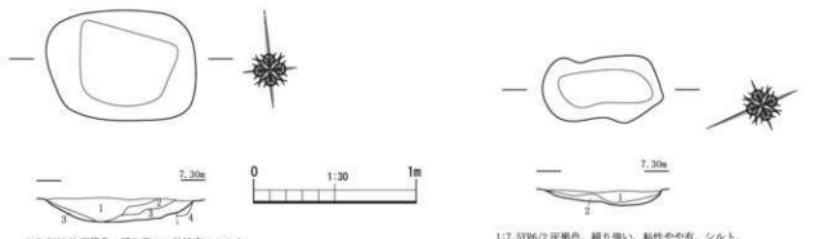
第14図 包含層出土石器実測図④(S=1/2)



第15図 土坑1実測図 (S=1/30) 及び出土遺物実測図 (S=1/3)



第16図 土坑2実測図 (S=1/30) 及び出土遺物実測図 (S=1/3、S=1/2)

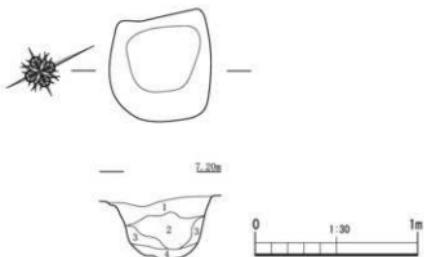


- 1:7. SYR6/2 灰褐色。繊り強い。粘性有。シルト。
地山 10W7/4 にぶい橙色シルトブロック径 10cm 以下多量に含む。炭化物含む。
2:7. SYR6/2 灰褐色。繊り強い。粘性有。シルト。
地山 10W7/4 にぶい橙色シルトがマーブル状に混ざる。炭化物含む。
3:7. SYR5/2 灰褐色。繊り強い。粘性有。シルト。
地山 10W7/4 にぶい橙色シルトブロック径 10cm 以下含む。炭化物少量化含む。
4:7. SYR5/1 灰褐色。繊り強い。粘性有。シルト。
地山 10W7/4 にぶい橙色シルトがマーブル状に微量に混ざる。別處構造。

1:17. SYR6/2 灰褐色。繊り強い。粘性やや有。シルト。
地山 10W7/1 にぶい橙色ブロック少量、小塊少量化含む。
2:17. SYR6/2 灰褐色。繊り強い。粘性やや有。シルト。
地山 10W7/4 にぶい橙色ブロック多量に含む。

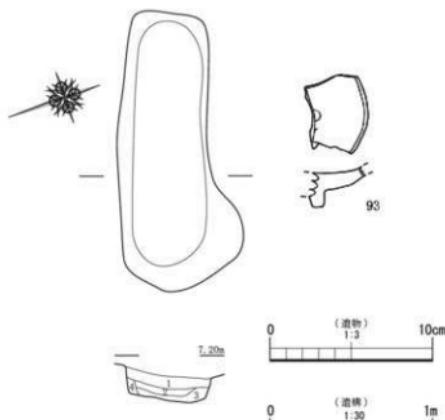
0 1:30 1m

第17図 土坑3実測図及び土坑4実測図 (S=1/30)



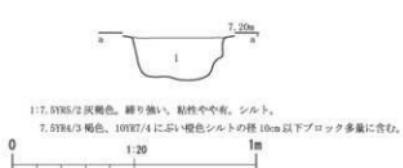
- 1:7. SYR5/2 灰褐色。繊り強い。粘性やや有。シルト。
地山 10Y87/4 にぶい櫻色シルトブロック、7. SYR4/3 櫻色シルトブロック多量に含む。小礫含む。
2:7. SYR4/2 灰褐色。繊り強い。粘性やや有。シルト。
地山 10Y87/4 にぶい櫻色シルトブロック、7. SYR4/3 櫻色シルト小ブロック。炭化物少量含む。
3:7. SYR4/2 灰褐色。繊り強い。粘性やや有。シルト。炭化物少量含む。
4:7. SYR6/2 灰褐色。繊りやや強い。粘性やや有。シルト。
地山 10Y87/4 にぶい櫻色シルトがマーブル状に混ざる。

第18図 土坑5実測図 (S=1/30)



- 1:7. SYR5/2 灰褐色。繊り強い。粘性やや有。シルト。
7. SYR4/3 楢色、10Y87/4 にぶい櫻色シルト径2cm以下ブロック多量に含む。炭化物、燒土粒含む。
2:7. SYR4/2 灰褐色。繊り強い。粘性やや有。シルト。
7. SYR4/3 楢色、10Y87/4 にぶい櫻色シルト径5cm以下ブロック多量に含む。炭化物、燒土粒含む。
3:7. SYR4/4 楢色。繊りやや強い。粘性やや有。シルト。
7. SYR4/3 楢色、10Y87/4 にぶい櫻色シルト径2cm以下ブロック少數含む。炭化物、燒土粒含む。
4:7. SYR4/3 楢色。繊り強い。粘性やや有。シルト。

第19図 土坑6実測図 (S=1/30) 及び出土遺物実測図 (S=1/30)



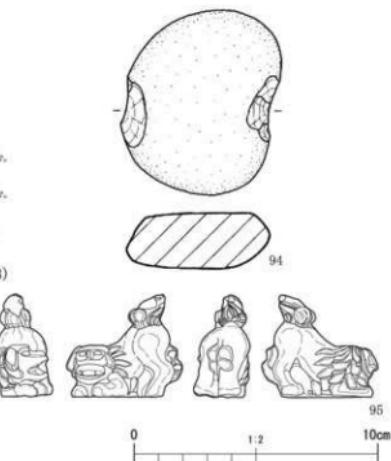
第20図 溝状遺構1土層断面図 (S=1/20)

第5節 近世の調査成果

近世の遺構は土坑6基、溝1条が検出された。何れの遺構も縄文時代の包含層を掘り込んでいることから縄文時代の遺物が混入する。また、土坑1は表土下で4層が検出される調査区西端付近で検出されたが、中世の遺物も多数混入することから、調査区西端付近の上位層が削平を受ける以前は、中世の遺構、もしくは包含層が存在していた可能性がある。

土坑1は検出面では平面楕円形であるが、途中に段を有し床面では平面長方形を呈する。土坑2、土坑6は平面隅丸長方形を呈する。土坑3、4は平面隅丸方形、楕円形を呈し、断面は浅い皿状を呈する。溝状遺構1は単層の埋土であり、埋土やその堆積状況から埋め戻された可能性が高い。

特徴的な遺物としては95の狛犬形土製品が挙げられる。型作りで、胎土に雲母片を含む。



第21図 その他出土遺物実測図 (S=1/2)

第1表 出土土器観察表

周報書 回番号	番号	造構等	種別 記号	法量 cm () : 沢式	色 澤	画 面	底成	調査		出土 (上: mm F: 厘)					備考	実測 番号	
								外 面	内 面	A	B	C	D	E			
p. 5 第 5 回	1	土坑 7	圓土器 深鉢		灰黃	107R6/2	良好	ナデの後。刷文	ナデ		無	無	多			墨化氣味	65
	2		圓土器 鉢		灰黃	107R6/4	良好	ナデの後。刷文	ナデ				2	少	結晶片岩多量に含む 風化氣味	66	
	3		圓土器 深鉢		灰黃褐	107R6/2	良好	ナデ、押立文	不明		2	1	多			粘土たる性 風化著しい	67
	8	1D1606	圓土器 深鉢	(18.0)	灰褐	7.5R6/2	良好	凹点文、織文 ナデ	織文、ナデ	5	少				結晶片岩少量含む	15	
	9	1D1332	圓土器 深鉢		灰・灰褐	7.5R6/3	良	虎紋、刷文	ナデ	1	1						18
p. 6 第 6 回	10	1D1629	圓土器 深鉢		灰	107R6/1	良好	長條条文、輪目 貼付帶文	ナデ	2	多						7
	11	1D1691	圓土器 深鉢		灰褐	5R6/2	良好	織文	押立文、ナデ	2	少	無	少				36
	12	1D1730	圓土器 深鉢		灰褐	107R6/2	良好	織文、ナデ	ナデ	1	少				結晶片岩多量に含む	48	
	13	1079	圓土器 深鉢		灰褐	7.5R6/1	良	ナデ、貼付突起、 貝殻条文	ナデ、貝殻条文	1	1	3	強		穿孔あり	1	
	14	1D1378	圓土器 深鉢		黑	107R6/1	良好	貼付突起、ナデ 条文	ナデ	9	1	1	多	多			40
p. 7 第 7 回	15	1D1660	圓土器 深鉢		灰褐	7.5R6/4	良好	貼付突起、ナデ	ナデ	2	多	少					5
	16	1D1682	圓土器 深鉢		灰褐	5R6/4	良好	横方向の織文	ナデ	2	少						4
	17	1D1625	圓文土器 深鉢		灰褐	2.5R6/1	良好	貼付突起、条文、 刷文	条文	2	多	少					41
	18	1D1635	圓土器 深鉢		灰褐	5R6/4	良好	貝殻条文、貼付 突起	ナデ	少							35
	19	202	圓土器 深鉢		灰褐	7.5R6/1	良好	ナデの後、虎紋、 貼付突起	ナデ	4	多	1	少				16
p. 8 第 8 回	20	201	圓土器 深鉢		灰褐	7.5R6/2	良好	ナデの後、三線文	工具ナデ、 ナデ	4	3						37
	21	203	圓土器 深鉢		暗褐色	5R6/4	良好	織文、ナデ	押立文、ナデ	3	強	3	強	少	穿孔あり		75
	22	1 (一括)	圓土器 深鉢	(15.8)	灰褐	7.5R6/1	良	貝殻条文、ナデ 貼付突起	ナデ	1	1	多	少				17
	23	1D1651	圓土器 深鉢		黑褐	2.5R6/1	良好	虎紋	ナデ	4	多						9
	24	1D713	圓土器 深鉢		黑褐	2.5R6/1	良好	棒状工具による虎 紋、ナデ	ナデ	2	少				結晶片岩多量に含む		13
p. 9 第 9 回	25	1D266	圓土器 深鉢		黑褐	2.5R6/1	良好	ナデの後、柔軟文 貝殻条文	ナデ	2	多						42
	26	1D708	圓土器 深鉢		灰褐	107R6/1	良好	キズと、刷文	ナデ、工具痕	1	多	無					34
	27	1D412	圓文土器 深鉢		灰褐	5R6/2	良	ナデの後、刷文、 ナデ	ナデ	5	多	1	1	強			28
	28	1D148	圓文土器 深鉢		灰褐	7.5R6/2	良	棒状工具による刷 文、ナデ	ナデ	4	2	2	2	強			19
	29	1D628	圓土器 深鉢		灰褐	107R6/1	良	凹点文、刷文	ナデ	2	少				波状口縁		26
p. 10 第 10 回	30	1D634	圓土器 深鉢		灰褐	7.5R6/2	良好	ナデの後、虎紋	ナデ	1	多				全体的に刷文氣味		29
	31	1D670	圓土器 深鉢		灰褐	5R6/2	良	長條条文の後虎 紋、ナデ	ナデ	2	多	1			口縁部にキズ		14
	32	1D475	圓土器 深鉢		灰褐	7.5R6/1	良好	押立文の虎紋、刷 文	ナデ	2	少	少					27

参考北: 宮崎小石 B: 石斧 C: 磨石 D: 角閃石 E: クサリ鐵

第2表 陶磁器観察表

周報書 回番号	番号	造構等	種別 記号	法量 cm () : 沢式	色 澤	画 面	底成	調査		出土 (上: mm F: 厘)					備考	実測 番号	
								外 面	内 面	A	B	C	D	E			
p. 14 第 14 回	86	土坑 1	刷		明灰褐	107R7/1	良好	無	無							床面出土	59
	87		刷	(5.3)	オリーブ灰	2.5R7/5	良	無	無								56
	88		刷	(6.6)			良好	無	無								57
	89	土坑 2	刷	(6.2)	褐	107R4/1	良	凹点ナデ、輪目 ラケズリ	凹点ナデ、輪目 ラケズリ	5	多	1	1	強			58
	90		刷		褐	5R6/4	良	無	無								60
	93		刷		褐	2.5R6/2	良	無	無							削出高台	63

参考北: 宮崎小石 B: 石斧 C: 磨石 D: 角閃石 E: クサリ鐵

第3表 出土土製品観察表

周報書 回番号	番号	造構等	種別 記号	法量 cm () : 沢式	色 澤	画 面	底成	調査		出土 (上: mm F: 厘)					備考	実測 番号
								外 面	内 面	A	B	C	D	E		
p. 15 第 15 回	93	人土器 火大		5.2	にぶい・中滑 5R5/4	にぶい・中滑 5R5/4	良好	ナデ	ナデ	1	少	無			底面凹凸及び高台に 力所付り有(燒付高台)	68

第4表 出土石製品觀察表

周藏員 回番号	番号	遺構等	種別	法値 cm () : 優元 口径 底径 高さ	色		底成	圓形		備考	実測 番号
					外 面	内 面		外 面	内 面		
p.14 第16回	91	土坑 2 石縫			赤灰	赤灰	福位の ケズリ	研磨			61

第5表 出土石器觀察表

周藏員	回番号	掘藏番号	遺構等	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	実測 番号
p. 5 第5回	4		土坑 7	石縫	ホルンフェルス	2.18	(1.16)	0.35	0.4		81
	5		土坑 7 底面	石縫	安山岩	7.3	3.2	1.3	27.5		133
	6		土坑 7	石縫	安山岩	(5.56)	(3.10)	1.10	15.5	下部欠損	140
	7		土坑 7	石縫	砂岩	3.95	5.20	1.49	43.5		163
p. 10 第11回	33	15366		石縫	ホルンフェルス	3.35	2.09	0.50	2.2		75
	34	159		石縫	ホルンフェルス	2.55	1.50	0.40	1.2		87
	35	15514		石縫	ホルンフェルス	2.70	1.55	0.60	1.3		89
	36	15359		石縫	ホルンフェルス	—	(1.29)	0.30	0.4		84
	37	1 (一括)		石縫	ホルンフェルス	1.95	—	0.30	0.2		79
	38	1 (一括)		石縫	チャート	—	—	0.45	0.5		83
	39	15376		石縫	チャート	1.49	1.20	0.30	0.3		82
	40	15481		石縫	チャート	1.80	1.25	0.45	0.7		85
	41	15473		石縫	ホルンフェルス	1.80	1.25	0.30	0.6		78
	42	1 (一括)		石縫	チャート	1.05	1.35	0.35	0.4		86
	43	15529		石縫	黒曜石	1.60	1.50	0.60	0.9		88
	44	1 (一括)		石縫	黒曜石	2.05	1.55	0.55	1.1		80
	45	15519		石縫	黒曜石	—	1.15	0.35	0.3		77
	46	15212		石縫	黒曜石	—	1.35	0.40	0.5		76
	47	15435		石縫	チャート	3.60	(4.40)	1.00	11.2	刀部欠損	142
	48	1 (一括)		石縫	ホルンフェルス	(3.20)	(2.50)	(1.40)	6.6	上半部(刃部)を 欠する	135
p. 11 第12回	49	1 (一括)		石縫	頁岩	2.10	1.35	0.15	1.0		118
	50	15493		石縫	頁岩	5.00	3.40	1.00	13.2		143
	51	15272		打制石斧	ホルンフェルス	8.85	4.85	2.20	85.7		97
	52	15469		打制石斧	ホルンフェルス	9.40	4.20	2.05	117.4		102
	53	15225		磨製石斧	ホルンフェルス	8.50	4.40	3.60	770.0		104
	54	15186		磨製石斧	砂岩	4.90	4.05	3.00	81.8		103
	55	15468		スクレイパー	ホルンフェルス	4.35	6.25	2.40	64.3		137
	56	15229		スクレイパー	ホルンフェルス	5.75	2.60	1.80	19.3		94
	57	15169		スクレイパー	ホルンフェルス	5.80	5.90	2.10	79.8		101
	58	1550		スクレイパー	尾鈎山懸性岩	8.50	6.20	3.00	130.2		149
	59	1 (一括)		スクレイパー	尾鈎山懸性岩	7.45	6.90	2.70	96.7		148
	60	1 (一括)		スクレイパー	尾鈎山懸性岩	9.55	8.55	3.35	215.5		144
	61	15513		スクレイパー	堆積岩	4.65	2.20	0.85	8.3		95
	62	15118		石縫のちスクレイパー	砂岩	6.30	7.90	2.20	99.5		125
	63	—	一括	スクレイパー	頁岩	7.00	5.20	2.95	68.3		139
	64	15412		スクレイパー	砂岩	4.65	7.45	1.35	47.7		119
	65	15291		スクレイパー	頁岩	8.55	5.95	2.3	111.0		132
p. 12 第13回	66	15332		石刀	頁岩	(10.75)	3.99	1.15	72.2		107
	67	—	一括	石刀未製作	頁岩	9.15	4.25	1.15	64.4		106
	68	15203		石縫	砂岩	5.20	6.25	1.40	66.0		164
	69	15157		石縫	砂岩	6.50	5.90	21.00	123.2		161
	70	—	一括	石縫	ホルンフェルス	6.40	7.30	2.30	171.4	打欠	162
	71	1563		石縫	砂岩	6.60	9.05	1.75	173.6	打孔後敲打 砾石の転用	160
	72	—	一括	石縫	砂岩	8.50	10.00	2.05	267.8		159
	73	15128		石縫	砂岩	9.10	9.45	2.99	328.2		158
	74	15277		石縫	砂岩	10.30	11.15	4.25	643.1		165
	75	15134		石縫	砂岩	6.60	6.35	2.95	150.4	練習	166
p. 13 第14回	76	15156		石縫	砂岩	6.65	3.40	1.15	40.0		167
	77	1 (一括)		石縫	尾鈎山懸性岩	5.00	3.95	1.55	35.8		170
	78	—	一括	石縫	砂岩	6.90	4.60	1.30	64.5	両端打欠	169
	79	15349		石縫	砂岩	4.95	4.65	3.35	97.4	有溝	173
	80	—	一括	石縫	尾鈎山懸性岩	6.10	5.90	4.25	215.0	有溝	172
	81	—	一括	石縫	尾鈎山懸性岩	6.50	5.70	4.75	233.7	有溝	171
	82	15230		磨石	砂岩	10.20	7.45	3.95	376.7		121
	83	—	一括	磨石	尾鈎山懸性岩	13.00	10.80	7.10	1495.0		155
p. 14 第16回	84	—	一括	磨石	尾鈎山懸性岩	7.85	6.75	3.40	240.9		154
	85	—	一括	磨石	砂岩	3.80	4.20	1.10	22.5		123
	92	3G2		石斧	ホルンフェルス	8.40	4.25	1.10	59.8		110
p. 15 第21回	94	P71		石縫	砂岩	7.65	6.55	2.20	178.3	両端打欠	168

第Ⅲ章 総括

ここでは本遺跡の縄文時代の調査成果について纏め、総括としたい。

土器 桶ノ口遺跡は船元式系土器や春日式土器前半期、上水流タイプが出土土器の中心を成すが、宮之迫3、4式土器、西和田式土器、中津式土器も少量ではあるが出土しており、断続的ではあろうが後期初頭まで集落が営まれていたと考えられる。また、取り上げが不可能であった土器が多数存在するという問題はあるが、宮之迫4式以降の土器は確認されておらず、西和田式土器、中津式土器と包含層内ではあるものの共伴していることは注目される。

宮崎県域では、縄文時代中期は土器の出土量が少ない時期であるが、船元式、春日式段階になると、下耳切第3遺跡、天神河内第1遺跡のような出土量が多い遺跡が出現することから、散発的ながら定住集落が形成されたと想定されている（金丸2010）。桶ノ口遺跡も、包含層を掘削したのは僅か65m²であることを鑑みると、このような定住集落が近接地を含め営まれている可能性がある。

石器 石器では石刀の出土と石錘の多量出土が注目される。

石刀は十分な検討ができなかったが、同じ頁岩製の未成品と思われる資料も出土しており、当地で製作された可能性もある。

石錘は総数92点出土しており、石器総数の20%近くを占める。紙幅の都合から表やグラフで示すことができないが、欠損部分が多い資料を除いて重量の分布状況を確認した。分布の中心は、20g～80g、110g～150gに見られるが、200g以上の資料も13点存在する。宮崎県高鍋町下耳切第3遺跡では、縄文時代中期前葉から中葉に属する386点の石錘が出土し、10g～246gの幅の中で10～90gに分布の中心があることが指摘されている。両者を比較すると、桶ノ口遺跡の方が最大重量も分布の中心も値が大きく、総体的に石錘の重量が重い傾向にある。下耳切第3遺跡は小丸川中～下流域に所在し、桶ノ口遺跡は一つ瀬川下流域～河口域に所在する。この様な錘具重量と地理的分布の関係性は、資料数が多い縄文時代後、晚期の資料を用いて藤木氏によって指摘されており（藤木2003）、下流域～河口域に所在する桶ノ口遺跡では、有溝石錘が見られる錘具種類の増加、分布中心重量の増加、重量に複数の中心が見られるという特徴が表れている。

以上のように、今回の調査では、県内では希薄であった、微高地における縄文時代中期中葉～後期初頭の調査成果が得られた。台地上の大規模な調査と比較すると、僅かな調査面積であり、遺跡の一端が明らかになったという状況であるが、当該期の基礎資料が得られたという点では重要な調査成果と言える。

引用文献

- 金丸武司 2010 「宮崎県における縄文時代中期土器の様相」『九州の縄文時代中期土器を考える』九州縄文研究会。
藤木 聰 2003 「宮崎県域の錘具の変遷と分布」『先史学・考古学論究』IV、龍田考古会。
※その他参考文献、報告書に関しては紙幅の都合上割愛させていただいた。

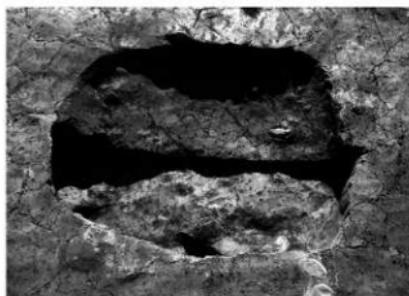


写真図版

図版 1



上：樋ノ口遺跡遠景（宝塔山公園より）
下：調査区全景（西から）

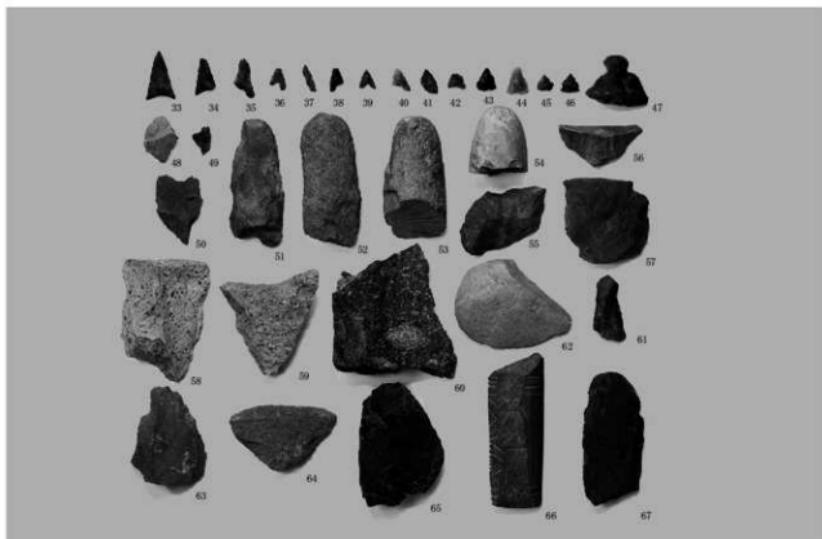


一段目左：土坑 7 完掘（北から）
一段目右：土坑 7 石匙出土状況（北から）
二段目左：包含層調査状況
三段目：石刀出土状況（南西から）
二段目右：石刀出土状況（西から）
四段目：包含層遺物出土状況（南から）

図版 3

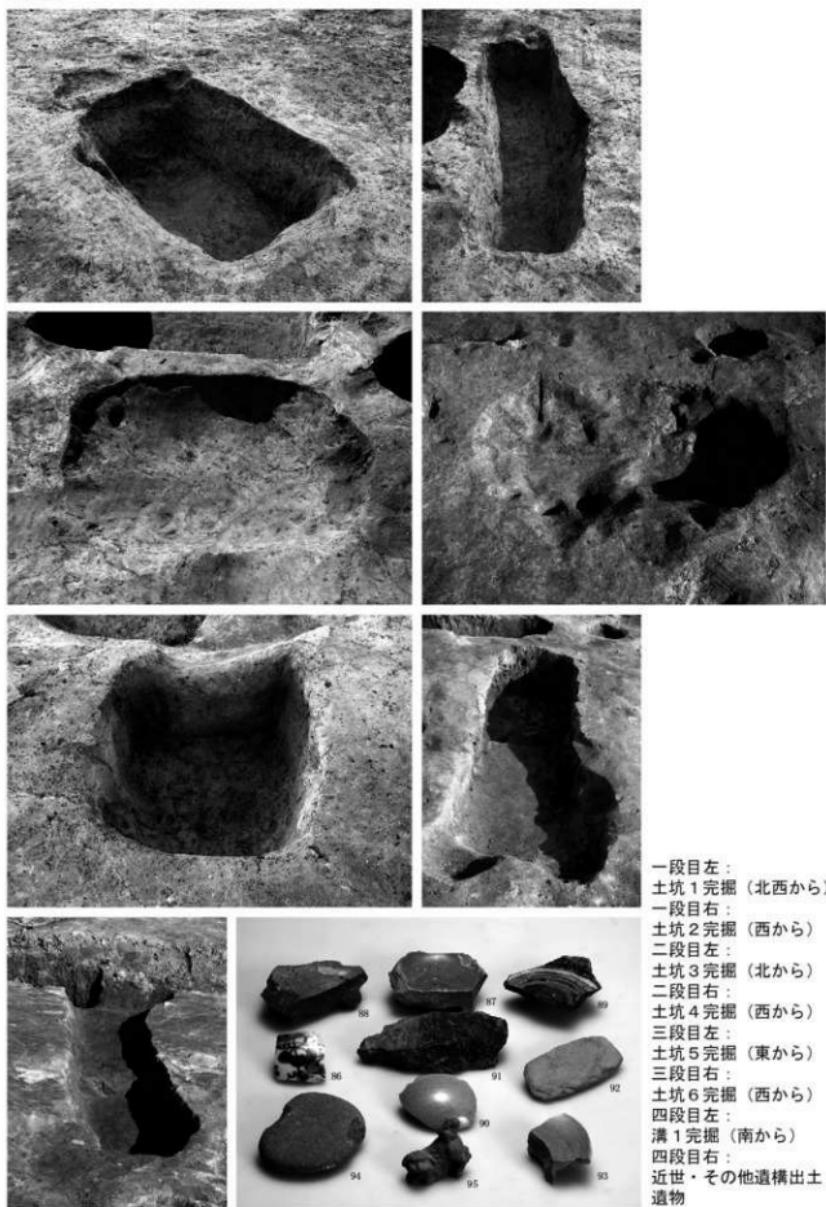


上：土坑 7 出土遺物
下：包含層出土土器



上：包含層出土石器①
下：包含層出土石器②

図版 5



報告書抄録

ふりがな	なかこうじいせき							
書名	中小路遺跡							
副書名	宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第126集							
編集者名	石村 友規							
発行機関	宮崎市教育委員会							
所在地	〒880-2101 宮崎市大字跡江4200番地3							
発行年月日	2019年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
○のくちいせき 樋ノ口遺跡	みやざきし さぢわらちょう 宮崎市佐土原町 かみたしまひのくわ 上田島樋ノ口	45201	16-028	32° 02' 51" 付近	131° 26' 13" 付近	2016.12.1 ~2017.1.31	185 m ²	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な出土遺物		特記事項		
樋ノ口遺跡	散布地	縄文 近世	土坑・溝状遺構	船元式系土器 春日式土器 宮之迫式土器 石鏃・打製石斧・磨製 石斧 スクレイバー・石刀 中近世陶磁器			縄文時代中期中葉から後期初頭 の石刀出土	
要約	樋ノ口遺跡	近世の遺構としては土坑6基、溝状遺構1条が確認された。またピットが110基確認されたが、の中には中世のピットも含まれるものと思われる。	縄文時代の調査は、調査区の東側で検出された暗褐色土を中心となった。本来は調査区の西側にも堆積していたと考えられるが、西から東に向かって下降傾斜する地形のため、西側に存在した暗褐色土は削平を受けたものと想定される。包含層の掘削面積は65 m ² と狭小であるが、非常に高密度で土器、石器、礫が検出された。土器は春日式土器、船元式系土器が中心であるが、全般的に脆く、取り上げが困難なもののが多數を占めた。石器は石刀と多量の石鏃の出土が特徴的である。					

宮崎市文化財調査報告書 第126集

樋ノ口遺跡

宅地造成に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2019年3月
発行 宮崎市教育委員会